

## 教育の機会平等 ～格差のリスクへの教育委員会の一手～

山県市教育委員会

「家庭の経済状況によって、子どもが受けられる教育に違いがあるのは、やむをえない」とする声を、本市は真っ向から否定する。つまり、教育委員会がその機会を提供する。

### 【山県地域未来塾「Fight Basic」】の開塾

令和元年、山県市教育委員会は、家庭での学習が困難であったり、学習が遅れがちで困り感を抱いていたりする生徒を対象にした【地域未来塾】を開塾した。

初年度塾生は36人、うち高校生が4名、中学3年生が6名、中学1・2年生が26名。自ら志願して入塾してきた生徒ばかりでは無く、保護者に背中を押されて来た生徒も少なくない。「希望者全員の受け入れ」をコンセプトに、入塾前の「保護者同伴面接」において、「自分の未来像」を確認し合い、公が行う塾をスタートさせた。

塾講師に名乗りを上げてくれたのは、教員OB等4名。「再就職」といったモチベーションであったかもしれないが、時間とともに「自分の未来」を口に始める生徒に、「教員魂」が再燃し、生徒が理解できるまでその場から離れようとはしない光景は、実に美しい。



指導方法	「自習」を基本とした質問形式による個別指導
対 象	市内在住、在学中の中1～高1生
場 所	高富中央公民館・美山中央公民館
開設時間	週1回 17:00～19:00
費 用	塾生：負担なし 経費：講師謝金等 257万円（国・県2/3、市1/3）

年間延べ40日間、590名が参加した「地域未来塾」を終え、鳥羽川の桜並木がピンク色に染まる頃、6人の中学3年生は自分が選択した高校への入学資格を手にしていった。

「（民間）塾に通わせてあげられないので助かりました。」と話していただけた保護者のひと言に、「地域未来塾」の存在意義を確かにし、今、2年目の桜咲く春に夢を託している。

### 【山県市部活動】の新設

美山中学校男子バレーボール部（板取川中との合同チーム）が、中体連大会で念願の東海大会出場枠に入るも、合同チームであるために幻の東海大会となった。旗取り大会故の制限など、生徒たちには納得できるものではない。

しかし、本市の生徒数は減少の一途、人員の増減で毎年変更をせざるを得ない「部活動複数校合同チーム」というパッチワーク的な対応は、救済措置とする大人の論理ではない。

文科省は「地域部活動」なる仕組みを提唱したが、これまでに獲得してきた「学校部活動」に対する「信頼感」を、社会人指導者（コーチ）が主たる指導者として行う部活動に移行していくためには、「教育的配慮」といった指導技術を部活動の運営の中に位置付けることが必要であると考え。歴史ある「部活動」という生徒にとって人生の重要な教育の機会を奪われることのないよう、段階的な移行により、「山県市部活動」に未来を託した。

（参考データ）令和2年度の部活動の現状である。

	生徒数 (人)	部活動数 (部)	部員数 (人)	加入率 (%)	クラブチーム等 参加者数(人)
高富中学校	432	14	372	86.1	37
美山中学校	139	8	96	69.0	5
伊自良中学校	73	8	67	91.7	4

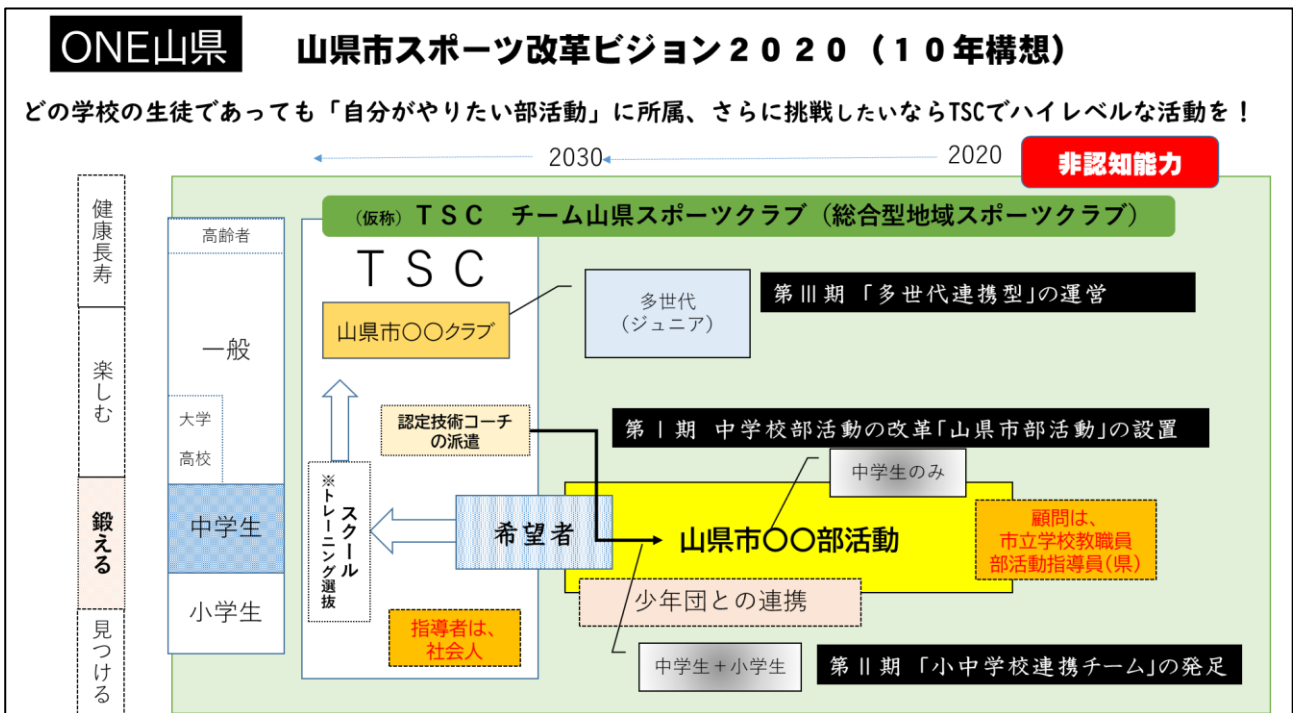
令和2年度、「山県市陸上部」・「山県市女子ソフトボール部」を山県市部活動として試行。

陸上部、ソフトボール部ともに、山県市総合型地域スポーツクラブ（TSC）において3校合同での活動実態があったため、「山県市部活動」の設置に対する理解が得られ、高富中学校に吸収されるかたちで、表向きは県中体連が認める「複数校合同チーム」という登録で静かなスタートを切った。

活動日は週2日（水曜日の15時30分から2時間と土曜日の3時間以内）とした。

教育委員会は、選手の輸送手段（マイクロバス利用）を確保。思いがけないコロナ禍により活動日は少なかったが、「仕組み」はできた。水面下で動き始めた構想は、以下の通り。

小中学校の教職員が指導者となる「部活動による人間教育」を基盤に持続可能性を担保。



近い将来、学校から部活動が切り離されるなら、TSCがその受け皿となる。